

いなくなっても
一生忘れられない友だちが、
一人、いればいい

家庭科
幼児保育進学コース主担
卓球部副顧問

平田 桂子



『きみの友だち』

重松 清 著 新潮文庫

— 教員になられたいきさつを教えてください。

私、小さな頃からとても移り気な性格だったんです。例えば、小学校の頃って毎年クラス替えがあるじゃないですか。私ってその度に好きな男の子が変わっていたんですよ。夢もたくさんあって、アイドルになりたいだとか、宝塚歌劇団に入りたいだとか…。その数ある夢の中に、学校の先生がありました。そして、先生になる夢だけは不思議と消えることがなく、むしろ年々その思いが強くなったんです。私が高校の頃は、まだ家庭科は女子生徒だけが受ける教科でしたが、1990年から男女共修になったんです。高校3年生の時に担任の先生から「今後は家庭科の先生が足らなくなるだろう」って聞いて、「先生になるのなら、家庭科しかない!!」って（笑）。

大学生の頃、カフェで友だちと話していて、「もしドラえもんがいたら、何を願います？」って話になりました。私は「学校の先生になることと、今お付き合いしている人と結婚すること」って答えたんですが、二つとも夢が叶いました。とても幸せな人生を送っていると感じています。

— 今回先生が取り上げられた本は『きみの友だち』。軽く内容を教えていただけますか？

とある中学校が舞台となって描かれる短編小説集です。各章で主人公が異なるんですが、登場人物は他の章とリンクしているところがあつたり、連作形式となっています。交通事故で足の不自由になった恵美ちゃん、病弱で学校を休みがちな由香ちゃん。ある事件がきっかけでクラスの誰とも付き合わなくなつて…。この本には、小・中・高校生の頃の「私」がたくさんいます。傷ついているのを悟られなくなったり、みんなに必死に合わせてたり、ひとりで強がっていたり。どの子もあの頃の自分。著者の重松さんの言葉は柔らかいけれど、自分の認めたくない姿、向き合いたくない姿を真正面から遠慮なく突きつけられ、心の機微が描かれ、でも最後には心が救われる、じんわり温かくなる、そんな本です。



——この本を読まれたきっかけは？

重松さんは、シンプルで読みやすい文体なんです、心のどこかがチクッとするような、いろんな思いを感じさせてくれる作品が多くて、私はずっと彼の作品が好きで追っかけていたんです。『きみの友だち』は私、平田が30代半ばの頃に出版された作品です。作品の中に出てくる足の不自由な恵美ちゃん。私の娘も足が不自由な生活を送っていて、母親という立場でこの作品と出会いました。子どもの頃にこの本と出会いたかったな、って思わせてくれた思い出深い本。何度も繰り返して読んでいる本です。

——私もこの本は読んだことがあるのですが、いろんな登場人物が出てきますよね。いじめっ子やいじめられっ子、リーダーシップを取りたがる子やイケズをする子。ただ、どれも登場人物としては違う子なんです、自分に当てはまる部分があつて。

そうなんです。どれも自分に当てはまっていて、自分に幻滅するというのか。振り返ってみると、子どもの頃って感受性が強くて、みんな何かしらで傷ついていることが多かったんじゃないかなって思いました。それも今思えば、すぐくつまらないことだね。例えば、私が中高生の頃だと、休み時間に一緒にトイレに行こうと思ったら、結局ひとりで行くことになって傷ついたとか。「そんなの、ひとりで行けばいいやん」って大人になると思うんですが、子どもたちにとってみればそれはとても大切なことで、怒ったり泣いたりしま

す。で、その傷ついた気持ちを上手く言葉にできないんです。苦しんでいることをどう言葉にすれば、相手に伝わるのかが分からないことも多い。

——私も親戚の子がまだ小学生なのですが、同調意識っていうんでしょうか。「みんなと僕」って感じで、仲間意識を保つために、自分が他の人に合わせるってのを小学生なのにもうやっていることに少し驚きました。

この本には「みんなに合わせていられない、私には大事なものがあるし、私の考えてものがあるし、私が大事にしたいあの子のことを思うと、みんなの『みんな』に入れない」みたいなエピソードが出てくる



んですよね。交通事故で足の不自由になった恵美ちゃん、と、病弱で学校を休みがちな由香ちゃん。同じ趣味を持つわけでもなく、性格もまったく違う。この二人、全然合っていないですよ。ただ、歩くペースが似ている。足が不自由だからゆっくりしか進めない、病弱だから早く歩けない。何かひとつきっかけがあったから、二人は仲良くなった。友だちというのは趣味が合わなくてもいいし、性格が合わなくてもいい。全部一緒じゃなくても、お互いを大切に思えるっていう、ありのままの自分でいられるっていう存在。登場人物の二人が、そういう友だちになれてよかったな、と思いました。私がこの本を読んで一番好きなところです。

——同じ空間にいただけが友だちではなく、同じ空間にいらなくても、思う気持ちや時間の深さが友だちのバロメーターなんじゃないかと。

この本に出てくる足の不自由な恵美ちゃんのお話。最後は恵美ちゃんがみんなの幸せになって終わるんです。私は最初、足が不自由な娘を持つ母という立場で、この本を手にしたんですが、自分が中学生だった頃を思い出したり、また今の自分に置き換えてみたりしていました。特に今、私は教師をしていて、たくさんの中高生たちと日常を過ごしています。私はいったん大学という時間を挟みましたが、もしかすると私の中では中高生で時間が止まっているところもあるかもしれません。大人になってしまった部分と、子どものままにいる部分。教師という職業柄、私は他の同世代の大



人より少しだけかもしれませんが、中高生の彼らと近い存在で、彼らと近い目線で話しかけられる存在だと思っているんです。

友だちは無理に探さなくてもいいんですよ。ずっと一緒にいないといけないって、関係性を保つために自分が無理をしている友だち。そんな友だちは仮にいなくなっても、いつときは寂しいかもしれないけど、いつかそう思わなくなる自分がいるかも。それより、長いこと会わなくても、会った瞬間に友だちとして時間を共有できる。そんな考え方もあるんだよって、私はみんなにも知って欲しいな。そしてそういう友だちの存在が、自分にとって人生の財産になるんじゃないかなって思います。

——最後に在校生のみなさんにメッセージを。

私が大人になって、母になってから読んだ本ですが、それでも自分が中高生の頃に持っていたような感情が思い出されて、胸が痛くなったり、「そうそう、そうなんですよ」って共感を得たりすることがたくさんある本でした。今、私にインタビューをしてくれている角井さんも、私より随分と若い方ですが、同じようにこの本でチクチクして共感もして、この本を通じて感情の奥底みたいな部分を分かち合えた気がします。

大阪国際中学校高等学校で学ぶみなには、勉強することも大切ですが、ここで過ごす6年間だったり、3年間で大切にしたいと思っています。大阪国際中学校高等学校に来てよかったことを感じてください。

この本の中に、息が苦しくなるからしんどい顔してるけど、空を見上げたら気持ち楽になって、自然と笑顔になるんだよ、というようなエピソードがあるんですけど、人間って生きていく中でいるんなことがあります。友だちとたくさん喋ってお腹の底から笑ったり、時には怒ったり泣いたりもする。そういう時間が、卒業して5年後、10年後、私くらいの歳になっても思い出として残るんです。それはみんなにとっての人生の財産になります。みんなの人生はみんなが主人公なんです。自分の人生をデザインしていく力を大阪国際で養ってもらえたら嬉しいです。

インタビュー

大阪国際中学校高等学校 図書館司書
株式会社 紀伊國屋書店 角井 貴乃